

一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより

第70回

藤辻なつまいをみせる藤江屋旅館。
三角屋根の洋館最上層には「ふく江や」と
屋号が記されている



宇都宮停車場界限

其二

「停車場外、客待の車夫、彼處に二列、此處に二班、乗車を勧めて五月蠅き潮の湧く似たり。街の両側には休息を勧むる茶婦。手を拱しての旅舎の番頭。夜に入れば「白木屋」「てのじ」など記せる提灯振り照して客引きに忙はしく、芋兵衛田吾作眼を廻さむばかりなり」。これは、「宇都宮繁昌記」（春圃居士／一八九八（明治三十一年）年）の、「宇都宮停車場」の一節。乗降客目当ての客引きや車夫がたむろする、今とはまた違った駅前の喧噪ぶりが目に浮かぶようだ。

また、「栃木県営業便覧」（一九〇七（明治四十一年発行）の宇都宮市川向町、小袋町界限だけ見ても、駅前から「白木屋支店」「藤江屋支店」「稲屋支店」「手塚屋支店」「戸室屋」「金靴屋」「近江屋」「丸井屋」「藤江屋本店」の名前が読み取れ、大小の旅館が軒を並べていたことがわかる。

こうした停車場界限の情景は、宇都宮が北関東を代表する商都であるとともに、第十四師団司令部を擁する軍都、そして日光参詣や古峯神社参詣の乗換駅であったからに他ならない。入隊や除隊、面会で来宇し宿泊した軍関係の人員だけでも相当なものであったことだろう。一九〇七（明治四十一年）の一日平均乗降客は千八百五十五人、一九一九（大正八年）年には四千八百五十人と倍増している。

駅前旅館では洋風の「白木屋ホテル」が有名だが、木造三階建ての大旅館「藤江屋旅館」も圧巻だった。この藤江屋旅館は、「昭和十二年ごろの宇都宮」（夕刊しもつけ社／一九三六（昭和十一）年）の主要旅



乗合バスが走る昭和初期の宇都宮駅前。
左手にはカンピョウ細工「ふくべ」を売る店も

館業一覽の中で次のように紹介。「本館主は上野フジさんで一切實務は養嗣子魁爾が當つて居る。フジさんは上野姓を襲つたが生地は上都賀郡南押原村大字藤江名主藤江家に生まれ豪腹な性格は遂に單身宇都宮に出て明治二十三年今の別館を建設し幾多の辛酸を嘗め明治三十年更に宇都宮驛前に三層樓の本館を建築し今や宮市の代表的旅館となつて了つた」。絵葉書に映し出された豪壮な「宇都宮駅前鉄道省指定宇都宮ホテル藤江屋旅館全景」、そして館前にずらりと並ぶ人力車からも、その隆盛ぶりがうかがい知れる。